

過去への遡りから現れる経験

松野孝一郎 (Matsuno, Koichiro)

長岡技術科学大学

新奇な経験現象の現れとしての生命の起源をとりあげたとき、求められているのは起源に後続する以後をいかにして起源に至る以前に接続することが出来るのか、その道筋の解明である。

以後を以前に結合する仕組みとしてこれまでに参照されてきたのは因果律である。因果律にあつては、特に断らないかぎり、結果が原因に結合することを述語判断において表明する。ここにおいて、因果律と述語判断の間に緊張が発生する。述語判断は主部と述部の同期した結合にその基盤を求めながら、因果律が主題とする以後と以前の結合は、同期せざることをがらの間での結合である。述語判断に忠実であるかぎり、そこでの因果律は結果が原因と恒等であることしか導かない。この結果と原因が恒等であるとする貧相な因果律は、われわれにとっての因果経験、あるいは慣れ親しんできた形而上学での慣行のいずれにも合致しない。

述語判断に基づきながら因果律の樹立に接近しようとする試みの一つに実証科学での力学系がある。力学系は状態と状態遷移を同期させた上で結合するとの述語判断を前提とする。そのために支払った代償が一樣、均質な時間の流れの受け入れであった。この仕組みの難点は、時間がいかにして一樣、均質に流れるに至ったかを不問に付しているところにある。それへの善後策の一つがパースによるアブ・ダクションである。

論理学を背景にして生まれてきたアブダクションの要点は、事後に誤ることが判明しても、臆することなく、結果に接合されうるはずの原因を事前に設定、想定することにある。ここで容認された誤りは経験から対象を抽出する際に用いた論理での誤りであつて、その誤りを指摘するメタレベルでの記述論理それ自体は無謬であるとされる。この記述論理は経験に直接に関わることのない形而上学での言明である。そのため、対象論理と記述論理との分離を経験現象そのもののありようにあてはめることはできない。記述の対象と目される経験現象そのものは記述を超えた対象である。アブダクションが経験の場で有効になるのは、対象となる誤りが自然化、物質化される状況においてである。

アブダクションが自然化されるにあたって肝要なのは、物質から成る行為体（者）の出現である。天下りの同期を要請することなく結果を原因に結合する際に、誤りを犯しうる当事者がこの行為体である。物質から成る行為体の範例は物質代謝を行う物質交換体であつて、交換されるべき物質を絶えずその外部に求めることを行う。しかも、物質交換体の出現は生命を前提としてはいない。逆に、生命は物質代謝に便乗して出現することのできる新たな経験現象に位置づけられることになる。

物質交換体である行為体が犯しうる誤りの典型は、求めても得ることが適わない物質資源へ向けての徒労である。物質交換体は物質交換を可能とする資源獲得のための

決定に絶えずかわり続ける。物質交換体が示す運動の特徴は、交換される物質の「押し込み・押し出し」ではなく、「取り込み・放り出し」にある。この「取り込み・放り出し」を個別・具体的に実装するのが決定と称する物質運動である。決定は常に、これまでになされて来た決定の更改を通じて実現される。そのため、決定という経験は一端、過去に遡ってこれまでの決定を更改することをその任とする。その決定の更改をうながすが、以後に誤りと化すことになる以前の決定である。ここでの「誤り」とは放置することのできない以前の決定を指す。

交換すべき資源を求めて行為する物質交換体は、過去に向かつては既決を、未来に向かつては未決を、現在においては既決を更改する決定を伴う。経験の成り立ちを決定行為に求めるならば、時間が経験を可能とする条件であるとする形而上学からの決別が求められる。経験が時間を生成することになる。以後を以前に結合するのが既決を更改する決定行為である。その結合によって、以後を以前に接続するという時間が生成されるに至る。物質界においてひとたび物質交換体が現れたならば、以後を以前に結合する時間経験によって、新奇な経験現象が現れるようになる。その顕著な事例が生命現象である。

物質交換体にとっての現在の特異さは、過去に固有な既決と未来に固有な未決をそこで結合することになる決定行為の動性にある。この現在に固有な動性は述語判断で記述される対象ではない。決定行為に述語判断を適用するならば、そこでの動詞の時制の変更を通して、同一の判断内容を過去形、現在形、未来形に推移させることが可能になり、現在に固有な動性が毀損される。過去への遡りから現れる決定行為の判断内容は、高々、前述語判断にとどまる。時間経験に固有な現在の動性は前述語判断に直結する運動の実現にある。